

修了生挨拶

本日はご多忙の中、我々修了生のために諸先生方にご臨席賜り、本日の学位授与式を執り行って頂きましたこと、誠にありがとうございます。修了生一同、心より御礼申し上げます。また、ただいま、國部克彦（こくぶかつひこ）研究科長、宮尾学（みやおまなぶ）専攻長より温かい励ましのお言葉を頂きましたこと、重ねて御礼申し上げます。

加えまして、日々の運営において様々にご配慮いただきました教務の皆様、また学業と仕事の両立を支えていただいた家族や職場の皆様をはじめ、学びの場を支えてくださったすべての皆様に感謝の意を表します。本当にありがとうございました。

さて、長かったような短かったような1年半を振り返ってみますと、様々な思い出が昨日のここのようによみがえります。

神戸大学での学びは、昨年3月末のオリエンテーションのときから始まりました。大学生のように期待と不安を胸に登校したその日、指定された席に座ると、その横で靴を脱いで椅子の上に体育座りをしている同級生がいたことを今でも鮮明に覚えています。そして周りを見渡したところ、何やら初日から騒がしい集団がいることに気づきましたが、彼らがエイトメンと自称するようになったのはもう少し後になってからのことでした。また、この日には小学校の同級生が現れ偶然にも大学院で再び同級生になるというミラクルも起こり、何だか不思議な世界に来てしまったと思ったのを覚えています。

その1週間後には早速授業も始まり、最初のコア科目が Sales and Marketing でした。長年、間接部門でキャリアを積んできた自分にとっては、まさに対極にあるビジネスそのものを扱った授業でしたが、そのような私をしり目に、70人近くもいる大教室で果敢に手を挙げて発言する同級生たちを羨望のまなざしで見ておりました。よくよく聞いてみるとそれほど中身のある話をしているわけでもなかったにもかかわらず、延々と語り続けるその積極性や行動力から、MBA 生としてのあるべき姿勢を学び取ることができる日々でした。

続くコア科目が Technologies and Operations Management でしたが、この頃には多少なりとも MBA での生活に慣れることができてきた一方、ケース PJ や RST の日本側受入れ準備なども並行し、忙しすぎて朦朧とした意識の中、日々のタスクを必死にこなしていたことを思い出します。この授業では、毎回ディスカッションの班分けのメンバーが異なったため、たとえばパナソニック・オーダー・システムのことが事前課題として与えられた日に、同じ班にパナソニックの人が2人おり、そこに松下さんも同席するというミラクルも起こったりするなど、毎回の班分けをいつも楽しみにしていたのを覚えています。

続く3つ目となるコア科目は、Individuals and Groups でした。ヒト系分野に強い関心を持って入学してきた自分としては、非常に楽しみにしていた科目の一つでしたが、ここでも

MBA 生の多様性がいかに発揮されました。「あるべきリーダーシップとはどのようなものか？」というお題を与えられたときに、ある人は「すべての部下や後輩に愛を持って接することだ」と語ったかと思えば、別の人からは「所詮仕事だし、俺はこいつらのママじゃないし」といった、極めてオーセンティックなリーダーシップ論が飛び出すなど、決して教科書だけでは学べない、地に足の着いた議論を経験できたと思っています。

4つ目のコア科目である Controlling and Reporting は、MBA 生のバックボーンの差が如実に表れた授業でした。経理パーソン、バンカー、果ては公認会計士といったプロが居並ぶ一方で、「P/L」と聞いてプロジェクト・リーダーかパイロット・ランプしか思いつかないという人まで、幅広いレンジの MBA 生が同じ授業の中で学ぶという斬新な体験をすることができました。

最後のコア科目は、MBA の学びの集大成となる Strategy でした。4つのコア科目を経た MBA 生たちはみな実力をつけ、ある者は A+レポートを連発してストラテジストとして名を馳せ、また、ある者はここまでのコア科目4つの成績が優以上であったことを知るや否や最前列に躍り出てアピールを始めるなど、積極的な姿勢をふんだんに見せつけていましたが、一方で、この授業が全員で受けられる最後の授業でもあったため、一日一日をかみしめながら毎週の授業に臨んでいたことを覚えています。

このような授業と並行して、プロジェクト系のカリキュラムも実施されましたが、そこでも数々の思い出がありました。入学当初から開始されたケース PJ では、懐かしの KINTO がお題となっていました。チームメンバーの議論は日を重ねるごとにヒートアップする一方であり、発表の直前期には、パワポに書く車のアイコンを4台にするか3台にするかという細部に至るまで、徹底的な議論が繰り返されておりました。

そして、このような生活が常態化した頃に迎えたのが、次のテーマ PJ でしたが、最終発表が年末に終わるのではなく年明け直後という、悪意しか感じない日程であったため、年末年始を挟んで11日連続で打ち合わせを行ったのは今でも良い思い出です。

最後に迎えた修士論文執筆は、ここまでのチーム戦とは異なり個人戦であったため、MBA 生の多様性が特に発揮されたカリキュラムであったと思います。テーマ設定についても、放送業界や家電業界、リーダーシップの棄損やぼんぼんなど、その人ならではの深い問題意識が現れるとともに、また進捗スケジュールについても多様性に富んでおり、締切りの2週間前に6万字以上のドラフトを仕上げた人もいれば、最終日の締切り5分前に論文を提出してしんがりを務める人もいたなど、まさに MBA の集大成に相応しいプログラムだったと感じております。

当初、神大 MBA に入学した動機は、当然ながら経営学を学びたいというものでしたが、神大 MBA の授業やカリキュラムは本当に中身の濃いものであり、学び終えた今となっては入学前とは全く違う景色が見えるようになりました。分からないことが分かるようになって

た、というより、何が分かっていないのかが分かるようになり、また答えがわかるというより、どのような問いに答えを出すべきかを考える、その力を身に着けるための1年半であったように感じています。

しかし同時に、ここまでお話してきた通り、この1年半を振り返ると、思い出すのは同級生のみんなと過ごした思い出ばかりです。職種もキャリアも年齢も異なる個性の強い仲間たちと、共に議論し、また支え合いながら日々の課題に取り組んできた生活は、何物にも代えがたいものでした。この先、何か問題に直面したときでも、彼ならどうするか、彼女ならどうするか。そして、うまくいかないときでも、厳しくも充実した1年半を共に過ごした仲間がいるというこの財産があれば、きっとどんなことでも乗り越えていけるだろうと確信しています。

最後になりましたが、このような素晴らしい学びと出会いの場を与えてくださった、神大MBAと、これを支えてくださった皆様に改めてお礼申し上げますとともに、神大MBAのさらなる発展を祈念いたしまして、修了生代表のあいさつと代えさせていただきます。

2024年9月28日
修了生代表 出橋徹也